

家族社会論とヘーゲル哲学

久田 健吉(名古屋市立大学「市民学びの会」講師)

今女子大学では「家族社会論」が模索されていると聞く。

女子大学で家族論というと、何か古いタイプの「良妻賢母」の思想が思い出され、ナンヤこれはと思われるかもしれない。私も少しは感じる。しかし一般大学でこのテーマが問題にされているとしたら、私は両手を挙げて賛成である。

家族とは何だろう。家族はどう考えたらよいのだろうか。今社会には倫理の崩壊現象が見られる。秋葉原事件、池田事件、サカキバラ事件はもちろんだが、地域からボランティア精神が衰退していることは否めない事実である。深いところで家族論が問題にされなければならない理由はここにある。

戦後の文化生活を支えた婦人会活動は、老人会婦人部になり活動を停止せざるを得なくなっている。お墓参りや盆踊り、敬老会を担う人がいなくなり、区長や区議員が汗水たらしてやっているが、この人たちはみな定年組。後何年持つだろう。死んだらやれんしなあと会話をしているとか。生きている間はやろうなと励まし合って。

団塊の世代が後期高齢者になった時、日本はどうなっているか。自助だけの、ジコチュウの社会になっていはいはしないか。

戦後の新しい家族論が、つまり女性の解放を柱とした家族論がこの現象を生み出したと言ったら語弊があるだろう。しかしこの現象を想定せずに新しい家族論は展開されてきたと言ったら、少しは納得していただけたらと思う。

新しい家族論は古い家族論との闘いに明け暮れてきた。家父長制の上に立った封建的家族論と。女は子どもを産む道具だとか、夫婦別姓は日本家族の美德を壊すものといった手合いとである。もちろんこれとの闘いは文句なしに正しい。

しかし家族とは何かという視点を忘れてきたのではないか。ヘーゲルは人倫（助け合う社会・隣人愛の社会）の土台は家族にあると言った。人間は単に自立するだけでなく、支え合える人間になるのでなければならないと。

本レポートは、『いっしょに暮らす。』（長山靖生）と『世代間連帯』（上野千鶴子・辻元清美）で現代家族論を問題にし、『ヘーゲル国家論の原理』（久田健吉）でヘーゲルの家族論を見ることにする。